雲で充たされた。一そよぎの空氣も皮膚の上を通らなかつた。

夕飯もまた靜かだつた。ある壓迫が、ある不安が、ある一種の漠然とした恐怖が、二人の男と二人の女とを沈默させたやうに見えた。

食卓の上が片附けられると、彼等は其のまゝテラッスに殘つて、長い間をおいてはたゞ話してゐた。夜が來た、窒息させるやうな夜が。と不意に地平線が大きな火の鈎で裂かれて、そしてそれが眩しい青白い光で、既に闇に包まれた四つの顏を照らした。すると遠い響が、重たくて弱い響が、丁度橋の上を通る馬車のごろ〳〵と鳴るやうに、地球の上を通つた。と大氣の熱は增し、空氣は不意になほ一層壓迫するやうになり、夕方の沈默はなほ深くなつたやうに見えた。

イイゼットは立ち上つた。

『わたし寢に行きますよ、』と彼女は言つた、『あらしが氣分を惡くしさうですから。』

彼女は額を公爵夫人の方へ出し、手を二人の若い男の方へ出した、そして去つた。

彼女の部屋はテラッスの眞上にあつたので、戸の前に植ゑてある大きな栗の木の葉は直ぐに綠色に輝いた、でセル并ギイイが簇葉の中のこの青白い光にぢつと目を据ゑてゐると、時々彼

は其處を影が通るのを見たやうな氣がした。所が光は消えた。
オバルヂ夫人は大きな歎息をした。
『娘は寢ました、』と彼女は言つた。
セルヰギィイは立ち上つた。
『僕もさうしませうよ、侯爵夫人。もしあなたがお許し下さるなら。』
彼は彼女の出した手にキスして、彼の順番で去つた。
と彼女はサヴルと二人きりで夜の中に殘つた。
忽ち彼女は彼の腕の中に、押しつけられ抱き緊められてゐた。
さうした後で、彼が止めようとしたにかゝはらず、彼女は彼の

前に跪いた、かうさゝやきながら、『わたし稻光りであなたを見たいのですよ。』
所がイイエットは、蠟燭を消してから、素足で、影のやうに辷つて、また緣側へ出て來た、そして痛ましい、混亂した疑惑に身を責められて耳を澄ました。
彼女は彼等の眞上に、テラッスの屋根の上にあつたので、見ることが出來なかつた。
彼女はたださゝやく聲を聞いたばかりであつた。と彼女の心臟は音で耳ぢゆうが一ぱいになつたほどに强く打つた。窓が彼女の頭の上で締つた。して見れば、セルヰギィイも彼の部屋へ

行つたんだ。母親は他の男と二人きりであつた。

第二の電光が、空を二つに裂いて、一瞬の間、彼女のよく知つてゐる全體の景色を、激しい不吉な光の中に照らし出した、と彼女は、空想の國で夢みる河のやうな、溶いた鉛の色をした大きな河を見た。其の時、聲が、彼女の下で、言つた。『あなたを愛しますよ！』

彼女はそれきり何も聞かなかつた。不思議な戰慄が身體の上を通つて、心は恐ろしい混亂の中に浮んだ。

重たい、無限の沈默が、永久の沈默と見えた沈默が、世界の上を覆うた。彼女の胸は何物とも分らない、恐ろしいものに壓

し付けられて、もう呼吸が出來なかつた。他の電光が空間を燒いて、一瞬の間地平線を明るくした、とまた次ぎの閃きが殆んど直ぐに起つて、また其の次ぎの閃きが續いた。

すると、彼女のさつき聞いた聲が、一層高い調子で繰返した。

『おゝ！　どんなにあなたを愛するか！　どんなにあなたを愛するか！』

とイイゼットははつきりと其の聲を認めた、それは母親の聲だつた。

大粒の生溫い雨が彼女の額に落ちた。そして微かな、殆ど氣も付かない位の戰ぎが、今一も始まりかけてゐた雨の戰ぎが、

簇葉の中を走つた。

やがて、騒ぎが遠くの方から走つて來た。木の枝に風の當るやうなざわ〳〵した騒ぎが。それは、地上や、川の上や、木の上に、どつと流れ落ちて來た夕立だつた。暫くの間に、水は彼女のまはりを川のやうに流れて、彼女を蔽ひ、彼女にはねかし、灌水浴のやうに彼女を濡らした。けれども彼女は動かないで、二人のテラツスでしてゐたことを考へてばかりゐた。

彼女は二人が立つて部屋の中へはひつて行くのを聞いた。ドアが家の中で締まつた。と娘は、知りたいといふ抑へらしない欲望に、彼女を苦しめ、物狂はしくする欲望に驅られて、梯子

を辷り下りて、そつと外の戸を明けて、そして恐ろしいどしや降りの下を芝生を横切つて、窓を見に叢の中へ走つて行つて隱れた。

たゞ一つが明るかつた、それは母親の部屋の窓だつた。と、不意に、二つの影が明るい方形の中に現はれた、並んだ二つの影が。するうちに、二つはぐつと近く寄つて、たゞ一つになつた。そして新らしい電光が、家の前面に其の迅速な目を眩ますやうな閃きを投げた時に、彼女は、二つが腕を互ひの頸のまはりにしつかりとからんで、抱き合つてゐるのを見た。

すると、氣も轉倒して、考へなしに、何を今してゐたかを知

りもせずに、彼女は全力を籠めて、金切り聲で、『かあさん！』と叫んだ、丁度人が死の危險を人に知らせようとして叫ぶやうに。

彼女の絶望の叫びは水の舌打の中に消えてしまつたが、抱き合つてゐた二つは不安さうに離れた。そして影の一つは消えて、他の一つは庭園の暗闇をすかすやうに覗きながら、何物かを見出さうとした。

やがて、見付けられることを恐れ、こんな時に母親に逢ふのを恐れて、イイヱットは家の方へ飛び歸つて、梯子段を、後に一段一段に滴る水の線を殘しながら、急いで駈け昇つて、そして部屋の中へ自分を閉ぢ籠めると、決して誰にも戸を明けまいと決心した。

そしてぴたりと身體に貼り付いた、川のやうに流れる着物を脱ぎもせずに、跪いて、手を合せて、人が涙と絶望との時に願ふやうな、人力以上の加護を、天の神秘の救ひを、不可知の助けを、苦しさの餘りに祈つた。

大きな電光の閃きがぴかりぴかりと其の青白い反射を彼女の部屋の中へ投げた、と彼女は不意に衣服戸棚の中に、濡れて亂れた髪の毛をした、自分とは迚も思はれないほどに變に見えた自分を見た。

彼女は其處に長い間、あらしが歇んでしまつたのを知らずにゐたほどに長い間、其のまゝにしてゐた。雨は降り止んで、光がまだ雲で暗い空にはひつて來た、そしてやはらかな、芳ばしい、心持のいゝ爽かさが、濡れた草と籐葉との爽かさが、開いた窓からはひつて來た。

イイゼットは立ち上つて、何をしてゐたとも考へずに、濡れた、冷たい着物を脱いで、寢床へ行つた。そして彼女はぢつと目を据ゑて夜の明けて來るのを見守つた。そしてまた泣いて、そしてまた考へ初めた。

自分の母親が！　ラヴァを！　何といふ恥辱だらう！　けれども彼女は、多くの書物で、女が、母親さへが、結末のペエジで名譽を恢復する爲めに、かういふやうに溺れたことを讀んでゐたので、自分の讀んだすべてのドラマと同じやうなドラマの中に包まれた自分を見出したとて無闇に驚きはしなかつた。彼女の最初の悲みの烈しさは、驚きのむごたらしい激動は、似寄つた境遇のごつちやになつた記憶の中に、既に幾らか薄らがされた。彼女の心は小説家に描かれたいかにも悲慘な出來事の中をさまよつた。と恐ろしい發見が、昨日から始まつたある新聞小説の自然の連續のやうに、少しづつ見えて來た。

彼女は自分に言つた。

『わたしおかあさんを救つてあげよう。』

そして、この健氣な決心で殆ど氣が晴れて、彼女は自分が強く、大きく、忽ち獻身と奮闘との用意が出來たやうな氣がした。で彼女は取るべき手段を考へた。たゞ一つ、彼女の小説的の性質に合つたのがよささうに見えた。で彼女は丁度俳優が將に演じようとする場面をさらふやうに、侯爵夫人としなければならぬ會見をさらつた。

太陽が昇つた。召使達が家の中を歩きまはつてゐた。小間使がチョコレエトを持つて來た。イイゼットは盆をテエブルの上に置かせてから言つた。

『お前、おかあさんにかう言つておくれ、わたし加減が惡いつて、あの紳士方がお立ちになるまで寢て居りますつて、昨夜眠れませんでしたつて、そして、これから休まうとして居りますから、誰にも邪魔されないやうにして頂きたいつて。』

小間使は、驚いて、絨氈の上に襤褸のやうに落ちてゐた濡れた着物を見た。

『お嬢さんは外へいらしつたんですか？』と彼女は言つた。

『あゝ、氣分を直さうと思つて、雨の中へ歩きに行つたのよ。』

小間使はスカアトや、靴下や、汚れた靴などを拾ひ上げた、そしていやいやさうに用心しながら、溺死人の着物のやうに濡

れたこれらの衣服を、一方の腕にかけて持つて行つた。

するとイイゼットは、母親の來るのをよく知つて、待つてゐた。

侯爵夫人ははひつて來た、暗闇の中で、『かあさん！』といふ叫び聲を聞いてから、疑念が胸の中に殘つてゐたので、小間使の第一の言葉で彼女は寢床から飛び出した。

『どうしたといふの？』と彼女は言つた。

イイゼットは彼女を見ると吃つた。

『わたし……わたし……』

と、不意の恐ろしい感情に壓しつけられて、彼女は咽せ出した。

侯爵夫人は、ぎよつとして、もう一度訊いた。

『どうしたといふのです？』

すると、すべての計畫もさらつておいた言葉も忘れてしまつて娘は兩手で顏を隱すと吃つて言つた。

『おゝ！　かあさん、おゝ！　かあさん！』

オバルヂ夫人はぢつと寢床の傍に立つてゐた、すつかり理解するには感動し過ぎてゐたが、併し彼女の力の生れて來る鋭敏な本能で、殆どすべてを推測してゐた。

イイゼットが涙に妨げられて、話すことが出來ずにゐると、

母親はとう〳〵堪らなくなつて、ある恐ろしい説明の來るのを感じながら、烈しく訊いた。

『さあ、一體何がどうしたといふのですか？』

イイヱットはやつと言葉を出すことが出來た。

『おゝ！　昨夜……わたし見ました……お部屋の窓を。』

侯爵夫人は眞青になつて、言つた。

『へえ！　それがどうしたの？』

娘はやはり咽び泣きながら、繰返した。

『おゝ！　かあさん！　おゝ！　かあさん！』

オバルヂ夫人の恐れと當惑とは怒りに變つて、肩を聳かして

出て行かうとした。

『本當にお前は氣が違つてゐるのだね。よくなつてから、話して貰ひませう。』

所が娘は、不意に兩手を涙の流れてゐる顏から取つた。

『いゝえ！……聞いて下さい……是非お話ししなければなりません……聞いて下さい……。わたしにお約束なすつて下さい……わたし達は二人で、ずつと遠い、田舍へ行つてしまひませう、そして田舍の人と同じやうに暮らしませう。そして誰にもわたし達がどうなつたかを知られないやうにしませう。ね、さうして下さい、かあさん、どうぞ、お願ひです、さうして下さいま

し？』

侯爵夫人は、面喰つて、部屋のまん中に立つてゐた。彼女は其の血管に平民の血を、怒りつぽい血を持つてゐた。そのうちに、羞恥の念が、母親の廉恥心が、愛が脅かされてゐる燃えるやうな女の激怒と漠然とした恐怖の念とに混ざり合つて、彼女は許しを乞はうか、それとも憤怒に身を任さうかと思ひながら、身を震はした。

『わたしにはお前の言ふことが分りません、』と彼女は言つた。

イイエットは答へた。

『わたしあなたを見ましたの……かあさん……昨夜……。もう

いけませんわ……御存じでせう……わたし達は二人で行つてしまひませう……わたしあなたを非常に愛しますわ、あなたが……を、……を、お忘れになるほどに……』

オバルヂ夫人は顫へ聲で言つた。

『お聞きなさいよ、嬢や、世の中にはあなたにまだ分らないやうなことが澤山あります。だから……忘れてはいけません……忘れてはいけません……そ……そ……そんな事を……決してもうわたしに話しては……なりませんといふことを。』

けれども娘は、自分で振つた救主の役を不意に身に扮して、言つた。

『いゝえ、かあさん、わたしはもう子供ではありません、わたしは知る權利を持つてゐます。本當にわたしは、わたし達が評判の惡い人達を、山師を迎へることを知つてゐます、そしてまた其の爲めに、みんながわたし達を尊敬しないことも知つてゐます。わたしはまだ他の事も知つてゐます。本當にもういけません、お分りでせう？　わたしはもういやです。わたし達は行つてしまひませう、あなたは寶石を賣つて下さい、もし必要があれば、わたし達は働きませう、そして何處かずつと遠い所で、正直な女のやうに暮らしませう。そしてもしわたしが結婚が出來れば、ずつと善くなりませう。』

母親は其の黑い、怒つた目でぢつと彼女を見てゐた。彼女は答へた。

『お前は氣が違つてゐるのだよ。さあ機嫌を直して、起きて、みんなと一緒に御飯を食べるやうに降りて來てお呉れ。』

『いゝえ、かあさん、あすこにはわたしが二度と見たくない人がゐます、お分りでせう。わたしあの人が行つてしまつて欲しいのです、でないとわたしが行つてしまひます。あなたはあの人とわたしとどちらでもお選びなさるがいゝ。』

彼女は寢床に坐つてゐた、そして人が舞臺でやるやうに話しながら、とう〳〵夢想してゐた芝居を演じながら、彼女の使命

を果さうとする努力で悲みをさへ忘れながら、其の聲を擧げてゐた。

侯爵夫人は、ぎよつとして、もう一度繰返した。

『お前は氣が違つてゐるのだよ・・・・』 それきり他に言ふことが見付からなかつた。

イイゼットは芝居がかつた力を籠めて答へた。

『いゝえ、かあさん、あの人がこの家を出て行かなければ、わたしが自分で出て行きます、わたしは弱つては居りません。』

『そして何處へお前は行かうといふの？・・・・何をしようといふの？』

『知りません、そんなことはどうだつて構ひません・・・・わたしはたゞわたし達が正直な女でさへあればよいのです。』

この循環して來る『正直な女』といふ言葉が、侯爵夫人に下等な女の憤怒を起させた。彼女は叫んだ。

『お默り、そんな風にわたしに話すことはなりません。わたしは他の人と同じなんです。分らないかい？ いかにも、わたしは一種の生活を送つてゐる。わたしはそれを誇つてゐるんだ。正直な女なんかわたしよりも劣つてゐるんだ。』

イイゼットは、びつくりして、彼女を見た。そして吃つて言つた。

『おゝ！　かあさん！』

けれども侯爵夫人は、激昂して、夢中になつた。

『えゝ！　さうさ、わたしは一種の生活を送つてゐる。それがどうだい？　もしわたしがさうでなかつたら、お前さんは今日にもお三どんになるだらう、わたしが昔やつたやうに、そして日に三十スウ稼ぐだらう、そしてお前さんは皿を洗ふだらう、そしてお前さんのお上さんは、肉屋へお前さんをやるだらう、分るかい？　そしてもしお前さんが、わたしが一種の生活を送つてゐればこそ一日ぢゆうぶら〳〵してゐるやうに、ぶら〳〵してゐようものなら、直ぐに戸の外へ突き出すだらう。そこで

さ。たつた五十フランの貯金を持つた貧乏な娘なら、お三どんなら、もし救貧院で死ぬのがいやなら、何とか身の振り方を附けねばならない。所で、わたし達に二つの道はありはしない、二つの道は、分るかい！　わたし達がお三どんだと、ありはしないんだよ！　わたし達は地位でもまた株の取引でも身代を作ることは出來ない。わたし達は身體の他に何も持つてゐやしないんだ、身體の他に何にも。』

彼女は懺悔してゐる悔悛者のやうに胸を打つて、そして顔を赤くして、興奮して、寢床の方へ近づいた。

『それが美しい娘だと、更に惡いのだよ！　其の顔で食べるか、

さもなければ、一生涯……一生涯貧乏に苦しまねばなりません……其處に選擇はないのです。』

そこでまた不意に前の考に歸つた。

『あゝいふ人達こそ、お前さんのいふ正直な女こそ、よつぽど自分を失くしてゐるんだ。あの人達こそ女郎なんだ、分るかい？　あの人達は少しも强ひられはしないんだよ。樂しく暮らして行くのに十分なお金を持つてゐてさ、それで道樂に男を持つんだもの。あの人達こそ女郎なんだ。』

彼女は心の亂れきつたイイゼットの寢床の傍に立つてゐた。

イイゼットは助けを呼ばうとしたり、逃げ出さうとしたりして、

鞭打たれる子供のやうに、聲を擧げて泣いてゐた。

侯爵夫人は默つて娘を見た、そして彼女の絶望に沈んでゐるのを見ると、自分も悲みと、悔と、やさしい心と、憐みの心とが身に染みて來るのを覺えて、寢床の上に腕を擴げたまゝ倒れると、一緒になつてすゝり泣き始めた、そして吃つて言つた。

『嬢や、これ嬢や、お前さんはどんなにわたしを困らせたか知れないよ。』

そして二人は一緒に、長い間泣いた。

やがて長く悲みを續けてゐることの出來ない侯爵夫人は、そつと立ち上つた。彼女はやさしい聲で言つた。

『さあ、嬢や、これは仕様のないことなんだよ、どうすることが出來るものかね！　今更變へることは出來ません。わたし達は生活を、なるやうにならせる他はありません。』

イイゼットは泣き續けた。打擊があまりに荒く、あまりに意外だつたので、直ぐに考へ直して、氣分を恢復することは出來なかつた。

母親はまた言つた。

『さあ、起きて御飯にいらつしやい、さうすれば誰も何にも氣が付きませんから。』

娘は口を利く事が出來なかつたので、頭を『いゝえ』と掉つた。

やがて彼女はすゝり泣きながら、のろい聲で言つた。

『いゝえ、かあさん、あなたはわたしの申したことを御存じです。わたしは決心を變へません。わたしはあの人達が行つてしまふまではこの部屋を出はしません。わたしはどうしてもあの人達の内の一人を二度と見たくありません、どうしても、どうしても。もしあの人達が二度と來るやうでしたら、あなたはもうわたしを御覽なさらぬでせう。』

侯爵夫人は目を拭いた、そして感動したので疲れて、つぶやいた。

『ぢやア、よく考へて、腑に落ちるやうになさい。』

そして、ちよつと默つた後で、言ひ添へた。

『さうさね、ぢやア今朝は休んでゐた方がよいでせう。わたしは午後に來て見ませう。』

そして娘の額にキスすると、彼女はもう落ちついて、着物を着換へに行つた。

イイヱットは、母親が見えなくなるや否や、起き上つて、一人で、全く一人きりでゐる爲めに戸に門をさしに走つた。さうしてから彼女は考へ始めた。

小間使が十一時頃にドアを叩いて、ドア越しに訊いた。

『侯爵夫人樣が、お孃さまが何か欲しいものはございませんか、

御飯に何か召上りますかどうか、伺つて來いと仰有いました。』

イイヱットは答へた。

『わたしお中が空いてはゐないのよ。たゞ邪魔をせずに置いて欲しいだけなの。』

そして彼女はずつと寢床にゐた、まるでひどい病氣にでも罹つたやうに。

三時頃に、誰かゞまたドアを叩いた。彼女は訊いた。

『どなた？』

答へたのは母親の聲だつた。

『わたしなの、孃や、あなたがどんなかと思つて見に來たんだ

よ。』

彼女は躊躇した。どうしようか？　彼女はドアを明けて、そして寢床へ歸つた。

侯爵夫人は傍へ寄つた、そして、癒りかけた病人の傍にゐるやうに低い聲で話した。

『どうだね、よくなつたかえ？　卵でも上がらないかえ？』

『いゝえ。有りがたう、何にも。』

オバルヂ夫人は寢床の傍に坐つた。二人は何にも言はずにぢつとしてゐた。やがて、娘が手を敷布の上にぐつたりと置いて、ぢつと動かずにゐると、彼女はとう〳〵言つた。

『起きて見ないかえ？』

イイエットは答へた。

『ええ、もう直きに。』

そしてから彼女は、まじめな、徐かな調子で言つた。

『わたし色々考へて見ましたわ、かあさん、そしてこれが……これがわたしの決心なの。過去は過去ですから、もうそれについては何にも申しません。けれども未來は違はねばなりません、……でなければ、……でなければ、わたしは自分の爲めに殘されてゐる取るべき道を知つてゐます。今は、その事については何も言ひますまい。』

侯爵夫人は、説明はもう濟んだことゝ信じてゐたので、また氣がいくらかむら〳〵として來た。それは實際可也にひどかつた。この大きなおん馬鹿娘は、もう疾うから當然知つてゐねばならなかつたのだ。けれども彼女はそれには何も答へないで、たゞ繰返した。

『起きて見るかえ？』

『えゝ、支度をしてますの。』

そこで母親は彼女の小間使となつて、靴下や、コルセットや、スカアトなどを持つて來た。そして彼女は彼女にキスした。

『夕飯前に少し散歩をしようね？』

『えゝ、かあさん。』

そして二人は水に沿うて歩いて行つた、極めて平凡な事ばかり話しながら。

四

翌くる日、朝早く、イイエットはたゞ一人で、セルヰギイイが蟻の歴史を彼女に讀んだ所へ行つて坐つた。彼女は自分に言つた。

『わたし決心がつくまでは此處を離れますまい。』

彼女の前には、彼女の足許には、水が、本流の早い水が、深い渦巻をなして音もなくすつと逃げて行く大きな泡や、旋波を一ぱいに浮べて、流れてゐた。

彼女は既に狀態のあらゆる方面と、それから自分の逃れ出るあらゆる手段とをぢつと考へた。

もし母親が彼女の持ち出した條件を心に掛けて呉れなかつたならば、現在の生活を、友達を、あらゆるものを捨てゝ、彼女と共に遠い所へ行つて隱れようとしなかつたならば、どうしようぞ？

彼女は獨りで行くことは出來る……逃げて。けれども何處へ？　どうして？　どうして暮らさう？

働いてか？　何を？　誰に頼んで仕事を見付けて貰はうか？

すると其の時、女勞働者の、下等社會の娘達の憐れな賤しい生活が、彼女には不似合な、幾らか不面目なものに見えて來た。

彼女は小説の中の若い女のやうに、家庭教師となつて、其の家の息子に戀せられて、そして結婚するやうになることを考へた。

けれどもそれが爲めには、生れがよくなくてはならなかつた、さうすれば、火のやうに怒つた父親が、息子の愛を盜んだことを非難した時に、誇らしげな聲でかう言ふことが出來たであらう。

『わたしの名はイイエット　オバルヂです。』

彼女はさうすることが出來なかつた。のみならず、それさへなほ平凡な、陳腐な方法だつた。

況して修道院は言ふに足らない。のみならず、彼女は宗教的生活に對しては、たゞ間歇的な瞬間的な信仰を持つたばかりで、何の難有味も感じてゐなかつた。誰も彼女と結婚して彼女を救つては呉れないだらう、今までが今までだから！　どういふ助けも男からは受けられさうでなかつた、どういふ出來さうな方法も、どういふきまつた手段も？

と其の時、彼女は何か勢ひのいゝ、本當に大きい、本當に强い、模範となるやうな事をしたいと思つた。そして彼女は死なうと決心した。

彼女は不意に、併し落ちついて、まるでそれが旅行に出ることでもあつたやうに、よく考へもせずに、死の性質を調べもせずに、それが二度と始まることのない終であり、歸ることのない出立であり、此の地上にも、生活にも、永劫の別れであることを理解もせずに、それにきめた。

彼女は忽ちこの極端な決心に、若い、興奮してゐる靈魂の氣輕さを以て心を向けた。

そして彼女は取るべき手段について考へた。所が、すべてが彼女には痛ましい、危險なものに見えたのみか、彼女を厭やにさせるやうな烈しい動作をさへ必要とした。

彼女は直ぐに短刀とピストルとを棄てた、それはたゞ片輪にするか、醜くするか、傷けるだけのものだつた、それに熟練したしつかりした手が必要だつた——縄は、いかにも平凡で、貧乏人が自殺の手段で、可笑しな不様なものだつた——水は、彼女は泳ぎを知つてゐた。そこで毒が殘つた、けれども何か？大抵のものが苦痛を與へ、嘔吐を催させる。彼女は苦むことも、吐くことも好まなかつた。やがて彼女はクロロホルムのことを考へた、ある雜報の中で、若い女が、この方法で自分を窒息させようとしたことを讀んでゐたのだつた。

すると彼女は直ぐに、其の決心に一種の喜びを、內心の誇り

を、自尊の念の湧くのを覺えた。人々が彼女の何であつたか、彼女の値打の何であつたかを見るだらう。

彼女はブウジヴルへ歸つて、藥劑師の所へ行つて、痛んでゐた齒の爲めに少しのクロロホルムを求めた。その人は、彼女を知つてゐたので、麻醉劑の小さな壜を彼女に與へた。

次ぎに彼女は歩いてクロアッシイへ行つて、其處で毒藥の第二の小壜を得た。

彼女はシャッウで第三を、ルイユで第四を得た、そして晝飯に遲く歸つた。彼女はこの歩行の後で非常に腹が減つて、運動して來た人のやうに旨さうに澤山食べた。

母親は、娘のかうまで腹の減つたのを見て喜んで、今は自分も氣が落ちつくのを覺えながら、食卓を離れると彼女に言つた。

『お友達がみんな、わたし達と一緒に日曜を暮らしにいらつしやる筈だよ。わたし公爵をも、士爵をも、ベルヂイギュさんをもお招きしたよ。』

イイエットは少し青くなつた、が何も答へなかつた。

彼女は間もなく出掛けて、停車場へ行つてパリイ行きの切符を買つた。

そして午後の間ぢゆう、藥劑師から藥劑師へ行つて、其のおのおのからクロロホルムの數滴づゝを買つた。

彼女は夕方ポケットを小さな壜で一ぱいにして歸つて來た。

彼女は翌くる日もまた其の方法を始めた、そして偶然にある藥種屋へはひつて行つて、一擧に、四分の一リットルを得た。

土曜日には出て行かなかつた。それは曇つて蒸暑い日だつた。彼女は長い籐椅子に身を伸ばして、テラッスでまる一日を暮らした。

彼女は殆ど何事も考へなかつた、きつぱりと覺悟をして落ちついてゐた。

彼女は、翌くる日、自分をよく見えるやうにと思つて、最もよく似合つてゐる空色の着物を着た。

そして鏡に向つて自分を眺めてゐたが、不意に自分に言つた。

『明日は、わたしは死んでゐるンだ。』と、ぞつとした身震ひが彼女の身體ぢゆうを走つた。『死んでしまふ！　わたしはもう口を利かないンだ、わたしはもう考へないンだ、誰ももうわたしを見ないンだ。そしてわたしは、二度ともう何にも見ないンだ！』

彼女は自分の顏を、今まで見たことがなかつたやうに、つくづくと見守つた、殊に目をよく調べたり、自分のうちに無數の事を、これまで知らなかつた人相の秘密な特徴を發見したりして、さながら自分の向うに、見知らぬ人を、新らしい友達を持

つてゐたやうに、驚いて自分を見守つた。

彼女は自分に言つた。

『これがわたしだ、其處に、鏡の中にゐるのがわたしなんだ。自分で自分を見るのは本當に變なものだ。だつて鏡がなかつたなら、わたし達は全く自分を知らずにゐるだらう。他のものはみんなわたし達がどんなかを知つてゐるだらう、だのにわたし達は、自分は何にも知らずにゐるだらう。』

彼女は濃い髪の毛の編んだのを取つて、胸の上におきながらあらゆる身振り、あらゆる姿勢、あらゆる動作を目で追つた。

『何て綺麗だらう、わたしは！』と彼女は考へた。『明日は、わ

たしは死んでゐるンだ、あすこに、あのベッドの上に。』

彼女はベッドを見た、そして敷布のやうに白くなつて、寢てゐる自分を見るやうな氣がした。

『死んでしまふ。八日のうちにはこの顔も、この眼も、この頰も、みんなたゞ黑く腐つたものになつてしまはう、箱の中で、地の底で。』

恐ろしい苦痛が彼女の胸を壓した。

麗らかな日光は野の上に溢れ漲つて、朝の軟らかな空氣は窓からはひつて來た。

彼女は坐つて、それを、死を考へた。

――世界が彼女から消えて行かうとしてゐたやうだつた、が、さうぢやない、世界は何も變りはしないのだ、彼女の部屋さへ。さうだ、彼女の部屋は依然としてもとのまゝでゐるだらう、同じベッドに、同じ椅子に、同じ化粧品を持つたまゝで、所が彼女は永久に去つてしまふのだ、そして誰も悲みもしないのだ、母親の外は、多分。

人々は言ふだらう、『ほんとに美しかつたよ、あの女は！　あの可憐なイイエットは、』と、それきりだ。で彼女は肱掛椅子の腕の上に載せてある手を見ると、また新らしく、それの腐つて行くことを、黒くて臭いどろ〳〵に自分の肉がなつて行くことを考へた。とまたぞつとする恐怖の身震ひが彼女の身體ぢゆうを走つた。そして彼女は全地球が滅びもしないのに、どうして自分が消えて失くなることが出來るかゞ分らなかつたほどに、彼女には自分があらゆるものゝ、野の、空氣の、日光の、生命そのものゝ一部であつたやうに思はれた。

割れるやうな笑ひ聲が、庭園で起つた、大きな聲が、大きな呼び聲が、今始まつた田舍家の連中の面白さうな騒ぎが。と彼女はベル并イギュ氏の朗らかな聲で、次ぎのやうに歌ふのを聞いた。

『わたしやお前の窓下に、

せめて姿を見たいとて。』

彼女は何も考へずに立つて、外を見た。と一同が喝采した。其處には五人がみんなゐた外に、知らない二人の紳士も一緒であつた。

彼女は無愛想に身を退いた、これらの男達が母親の家へ、お茶屋へ來たやうに遊びに來たといふ考で身を裂かれるやうに思ひながら。

ベルが晝飯を知らして鳴つた。

『わたしみんなに死に方を見せてやらう、』と彼女は自分に言つた。

彼女はキリスト教の殉教者が獅子の待つてゐる競技場へはひつて行くやうな覺悟をして、しつかりとした足取りで降りて行つた。

彼女は愛想のいゝ、併し幾らか高慢な樣子をして微笑しながら、彼等と握手した。セルギイは彼女に訊いた。

『今日は御機嫌が惡くはありませんか、嬢さん?』

彼女はまじめな變な調子で答へた。

『今日はわたし馬鹿を盡さうと思つてゐますよ。バリイにゐるやうな氣分なのよ。氣をお付けなさいよ。』

それから、ベルギイギュ氏の方へ向いて、言つた。

『あなたはわたしの護衛になるのですよ、ね、マルヂワジイ。わたし皆さんを御飯の後でマルリイのお祭へお連れ申しますわ。』

實際マルリイに祭があつた。彼等は彼女に二人の新來者を、タミイヌ伯爵とブリクトウ侯爵とを紹介した。

食事の間、彼女はそれ以上に何にも言はずに、午後の面白かるべきことに心を向けてゐた、みんなが何にも察しない爲めに、みんなが一層驚く爲めに、みんなが次ぎのやうに言ふ爲めに——

——『誰が考へたんだらう？　あの女はいかにも樂しさうに、いかにも滿足さうに見える！　かういふ頭の中には何が起るか知れやしない？』

彼女は夕方のことは、選んだ時間のことは、みんながテラッスにゐる時のことは、考へないやうに力めた。

彼女は元氣を付ける爲めに我慢の出來るだけ多くの葡萄酒を飲んだ上に、小さな盃に二杯上等のシャンペンを飲んだ、で食卓を離れる時は赤くなつて、幾らかはしやいで、身體も心も熱くなつて、今は鐵面皮に、何事に向つても大膽に振舞へるやうな氣がした。

『出掛けませうよ！』と彼女は叫んだ。

彼女はベルヂイギュ氏の腕を取つて、そして其の他の者の足並を揃へた。

『さあ、あなたはわたしの大隊を編成して下さいよ、セルギイイ、わたしあなたを軍曹に任命します。あなたは外側を、右の方を守つて下さい。それから、先頭に外國兵を、二人の外國の方を、公爵と士爵を進ませて下さい、それから、殿りには、今日兵籍に加はつた二人の新兵の方を。さあ！』

彼等は出發した。そしてセルギイが喇叭をまね初めると、二人の新來者は太鼓を打つやうな風をした。ベルギイギュ氏は聊か當惑して、低い聲で言つた。

『イイエットさん、ねえ、無茶なことはお止しなさいよ、お名前を汚しますよ。』

彼女は答へた。

『あなた方をわたしは汚してゐるのよ、レエジネ。わたしのことなんか、ちつとも構ひません。明日は、もう出て來ませんからね。あなたにはお氣の毒ね、わたしのやうな女などゝ一緒に出て來てはならなかつたのだわ。』

彼等は道行く人を驚かしながら、ブウジヴルを通り抜けた。みんなが振り返つた。住民は彼等の戸口へ出て來た。ルイュからマルリイへ走つてゐる小さな鐵道の旅客は罵つた。ブラットホウムに立つてゐる人々は、叫んだ。

『水へやれ！……水へやれ！……』

イイエットは捕虜を引いて行くやうにベルヰイギュ氏の腕を掴んで、軍人の歩調で進んだ。彼女は笑はなかつた、顔には青ざめたまじめさと、一種の冀落付きとがあつた。セルヰギイイは命令を叫ぶためにだけ喇叭を止めた。公爵と士爵とは、それが馬鹿に可笑しい、高尚な趣味であつたのを見てから、非常に面白がつてゐた。二人の新兵は絶えず太鼓を打ち續けた。

祭の場所に着くと、彼等は一種の感動を惹き起した。娘達は喝采し、若い男達は嘲つた。そして細君を腕に連れてゐた肥えた紳士は、羨ましさうな聲をして、言つた。

『世間にはのんきな人もあるものだ。』

彼女は木馬を見ると無理にベルヰイギュを自分の右に乗らせた、と彼女の小隊はぐる〳〵まはつてゐる獣を後の方から乗つ取つた。時間が濟んだ時に、彼女は降りることを拒んで、自分の護衛を無理に、この子供の乗用馬の脊中に續いて五遍も止まらせたので、彼等を難し立てゝゐた見物人は非常に嬉しがつた。ベルヰイギュ氏は青ざめて、降りた時は胸が悪かつた。

それから彼女は小屋掛けの間をうろつき始めた。彼女は自分のすべての部下を、圓をなしてゐる見物人のまん中を無理に押し通らせた。彼女は彼等に可笑しなおもちやを買はせたので、彼等はそれを自分の脇の下に持つてゐなければならなかつた。公

爵と士爵は、常談があまりにひどくなり過ぎたと思ひ始めた。

セルヰギィイと二人の鼓手とだけはまだ氣落ちがしなかつた。

彼等はとう〳〵場所の果てまで來た。その時彼女は變ふ風で、陰險な惡意のある目付で從者等をぢつと見た。と妙な思ひ付きが頭の中に浮んだ。彼女は河を見下してゐる右岸の上に一同を並ばせた。

『どなたでもわたしを一番多く愛してゐる方は水の中へ飛び込んで下さい、』と彼女は言つた。

誰も飛び込まなかつた。群集は彼等のうしろに集まつた。白いエプロンをかけた女達は、うつとりとして見てゐた。赤いズボンを穿いた二人の騎兵は、馬鹿笑ひに笑つた。

彼女は繰返した。

『ぢやア皆さんの中には、わたしの望みで水の中へ飛び込まれる方は一人もありませんのね？』

セルヰギィイは呟いた。

『いやどうも、これはいかん。』

と、彼は河の中へ、ざんぶと飛び込んだ。

彼が落ちると其の飛ばしりが、イイゼットの足までかゝつた。

驚きと喜びの呟きが群集の中に起つた。

すると娘は地上から木の切れ端を拾つて、流の中へ投げ込ん

だ。

『持つて來い！』と彼女は叫んだ。

若い男は泳ぎ始めた、そして犬のやうに、浮んでゐる板切れを口に銜へて、持ち歸つて、それから、土手を攀ぢ登つて、彼はそれを差出す爲めに片膝地上に突いた。

イイエットはそれを取つた。

『よくした、』と彼女は言つた。

そして親しげな輕打で、彼女は彼の髪の毛を撫でた。

肥えた女がむつとして言つた。

『よくまああんなことが出來る！』

別の女が言つた。

『あんなことをして何が面白いだらう！』

ある男が言つた。

『俺ならあんな阿魔の爲めに飛び込みはしねえぞ！』

彼女はまたベルヂイギュの腕を取つて、其の顏に吐きつけた。

『あなたは本當に愚圖だよ、自分がしくじつたのを知らないンですか。』

彼等は歸りに向つた。彼女は通行人にいら〳〵した目付を投げた。

『どうしてかう揃ひも揃つて畜生面をしてゐるのだらう、』と彼

女は言つた。

そしてから、目を一行の顔に擧げて、言ひ添へた。

『あなた方だつておんなじさ。』

ベルヂイギュ氏はお時儀をした。と振り返つて、彼女は公爵と士爵とのゐなくなつたのを見た。セルヂギイは哀れに濡れしよぼたれて、もう喇叭も吹かず、陰氣臭い樣子をして、やはりもう太鼓を叩かなくなつた二人の疲れた若い男達の傍を歩いてゐた。

彼女は冷かに笑ひ出した。

『あなた方はたんのうなすつたやうだわね。だけどもこれがあ

なた方の樂むッて仰有るものなんでせう？　あなた方はそれが爲めにいらつしたんだわ、だからわたしあなた方のお金相應のことをしてあげたんだわ。』

それきり彼女は何も言はずに歩いた。と、突然、ベルヂイギュは彼女の泣いてゐるのを見た。びつくりして、彼は訊いた。

『どうなすつた？』

彼女は呟いた。

『抛つておいて下さい、あなたに關係したことぢやありません。』

所が彼は、馬鹿のやうに言ひ張つた。

『おゝ！　お嬢さん、え、どうなすつた？　誰があなたを苦しめたの？』

彼女はたまり兼ねて、繰返した。

『お默りなさいつてば！』

と、俄に、彼女は、其の心を溺らした絶望の悲みにもう耐へられなくなつて、歩くことも出來なかつたほどに烈しく啜り泣き初めた。

彼女は顏を兩手で蔽うた、そして絶望の烈しさに息を止められ、塞がれて、咽喉の下でせい〳〵聲を出して喘いだ。

ベルヂイギュは彼女の傍に立つたまゝ、全く途方に暮れて、繰返した。

『僕にはさつぱり譯が分りません。』

所がセルヂギイは不意に進み出た。

『歸りませうよ、嬢さん、人が見るぢやありませんか、あなたが往來中で泣いてゐるのを。なぜあなたはそんな馬鹿なことをなさるんです、たゞあなたを悲しくするばかりぢやありませんか？』

そして、彼女の肱を取つて、彼は彼女を引つぱつた。所が、彼等が別莊の鐵門に着くや否や、彼女は駈け出して、庭園を横切つて、梯子段を昇つて、自分の部屋へ閉ぢ籠つた。

彼女は夕飯の時まで出て來なかつた、そして、その時は、非常に青ざめてまじめであつた。けれども一座のものは陽氣だつた。セルヰギイは田舍の商人の家で勞働者の衣服を、天鵞絨のズボンと、花模樣のチョッキと、メリヤスのシャツと、上衣とを買つて着てゐた、そして彼は下等社會の人達のやうな風に話した。

イイエットは勇氣の衰へて來るのを感じたので、早く濟むやうにと急がした。コウヒイが配られるや否や、彼女はまた自分の部屋へ昇つて行つた。

彼女は窓の下で樂しげな聲音を聞いた。士爵が卑しい、下手な外國語のしやれを、際どい常談を言つてゐた。

彼女は絶望して、耳を澄ました。セルヰギイはほろ酔ひ機嫌で、酔つぱらつた勞働者をまねながら、侯爵夫人を『姐御』と呼んでゐた。と、不意に、彼はサヴルに言つた。

『よう！　親方！』

どつと一座の笑ひが起つた。

と、イイエットは決心した。彼女は先づ一枚の書簡箋を取つて書いた。

わたしは死にます、おもちやにならぬために。

ブウジヴル、日曜日、夜九時。

そして追つて書きに書いた。

左樣なら、おなつかしいかあさん、許して下さい。

彼女は封筒の封をして、宛名を『オバルヂ侯爵夫人樣』とした。

それから彼女は長い椅子を窓の傍に轉ばして行き、小さなテエブルを手の届く所へ引いて、その上にクロロホルムの大きな壜を一掴みの脱脂綿の傍へ置いた。

花で蔽はれた大きなばらの木が、テラッスから彼女の窓まで届いてゐて、それが、甘い、柔らかな香を夜の中へ、そよ吹く風に漂はせて吐いてゐた。で彼女は暫くの間ぢつとそれを吸つてゐた。上弦の月が暗い空に浮んでゐた、左の方は幾らか咬み切られて、そして時々薄い霧に蔽はれた。

イイエットは考へた。

『わたしは死なうとしてゐるンだ！　わたしは死なうとしてゐるンだ！』　と、彼女の心臓は啜り泣きで膨らんで、苦痛で張り裂けさうになつて、息が止まりさうになつた。彼女は心の中で、誰かに憐みを乞ひたいやうな、救はれたいやうな、愛されたいやうな氣がした。

セルヂギイイの聲が起つた。彼はいかゞはしい話をしてゐて、

それはのべつに破れるやうな笑聲で途切らされた。侯爵夫人は殊に他の者よりも一層聲高に笑つた。彼女は絶えず繰返した。

『かういふ話と來たら、この人に及ぶ人は先づありませんね！ふ！　ふ！　ふ！』

イイエットは壜を取つて、栓を拔くと、液體を少し綿に注いだ。強い、甘い、變な香が起つた。で彼女は脣に綿片れを近づけると、思ひきつて其の強い、いら〳〵させるやうな香をぐつと呑み込んだ、と彼女は咳嗽をした。

そこで口を塞いで、吸ひ始めた。彼女はこの致命の氣體を長い一息きで吸ひ込んだ、目を閉ぢて、心の中へ無理にあらゆる思想を押し込んで、もう此の上に考へまいとし、知るまいとしながら。

始めは胸がだん〳〵大きくなつて、擴がつて行くやうに、そして今までは悲みを背負はされて重たかつた魂が、まるで彼女を壓し潰してゐた重しが持ち上げられ、輕くされ、運び去られでもしたやうに、輕く、輕くなつて行くやうに思はれた。

何か生き生きとした氣持のいゝ物が、四肢の端々までも、足の指や手の指の尖きまでも滲み通つて、肉の中へはひつて行つた、一種のぼつとした醉心地が、甘い熱が。

彼女は綿が乾いてゐたのを見た、と、まだ死んでゐなかつた

のに驚いた。彼女の五感は一層鋭く、一層敏く、一層活潑になつたやうに思はれた。

彼女はテラッスで呼かれてゐる最も低い話聲までも聞いた。クラヴロウ公爵がいかにして彼がオウストリアの將軍を決鬪で殺したかを話してゐた。

その時、ずつと遠くで、野の方で、彼女は夜の聲を聞いた、時々吠える犬の聲や、蛙の短い鳴き聲や、殆ど聞き取れない位な木の葉のそよぎや。

彼女はまた塊を取つて、また新らしく小さな綿切れに染み込まして、そしてそれをまた吸ひ始めた。暫くの間は、やはり何も感じなかつた。そのうちに、一度彼女を襲うたあののろい妖惑するやうな愉快な感じがまた襲うて來た。

二度彼女はクロロホルムを綿の中にそゝいだ、今度は肉體のこの感覺と精神のこの感覺と、魂が其處をば迷ひ歩く夢のやうなこの麻痺とを熱望して。

彼女はもう骨をも、肉をも、脚をも、腕をも持つてゐないやうな氣がした。誰かゞ彼女から、すべてさういふものを、やさしく、彼女の氣附かぬうちに取り去つた。クロロホルムは彼女の身體を空にして、たゞ、彼女の今まで決して感じなかつたやうな自由な、大きな、活き〳〵とした、目覺めた心だけを彼女

に殘した。

彼女は忘れてゐた無數の事柄を、子供時分の小さな事柄を、彼女を愉快にした些細な事柄を想ひ出した。彼女の精神は、不意にまだ知られてゐないやうなすばやさを與へられて、最も異つた考から考に飛んだり、無數の冒險をして通つたり、過去の中をうろついたり、未來に希望する出來事の中をさまよつたりした。そして其の活き活きとした氣輕な考が彼女に肉體の快樂を與へた。彼女はかういふ風に夢みることに人間以上の快樂を覺えた。

彼女はなほ聲音を聞いた、けれどももう其の言葉を聞き分け

ることは出來なかつた、それが彼女には別の意味を持つたやうに見えた。彼女は不思議な、絶えず變つて行く仙鄕のやうな所に沈んで、さまよつた。

彼女は大きなボウトに乘つて、花の咲き滿ちた美しい國を通つてゐた。彼女は人々の岸にゐるのを見た、その人達は非常に聲高に話してゐた、と彼女はどうしてかは分らぬがまた地上にゐた、するとセルギイが、皇子のやうな服裝をして、彼女を鬪牛戯へ連れて行かうと探しに來た。

町はしやべり合つてゐる通行人で一ぱいであつた、そして彼女は彼等の會話を聞くと、其の人々を知つてゐでもしたやうに

驚かなかつた、といふのは、彼女は夢のやうな醉心地の中で、やはり母親の友達が、テラッスで笑つたりしやべつたりしたのを聞いてゐたからだつた。

そのうちにあらゆるものがぼうつとなつた。

と彼女は、非常に愉快な無感覺になつて、目覺めたが、容易に何も思ひ出すことが出來なかつた。

かくして、彼女はまだ死んでゐなかつた。

却つて彼女はいかにも靜かな氣持がして、かういふ身體の快樂の中に、かういふ精神の歡樂の中に、それを急いで終らせずにゐたいと思つた！　彼女はこの美妙な假眠の狀態を永久に續かせたいと思つた。

彼女は緩やかに呼吸して、向うに、木立の上にある月を眺めた。何か彼女の精神の中で變つたものがあつた。彼女はもう今までのやうには考へなかつた。クロロホルムは、彼女の身體と魂とを柔らげて、其の苦痛を鎭め、死なうとした其の欲望を眠らせた。

なぜ生きてゐてはならぬのか？　なぜ愛されてはならぬのか？　なぜ幸福な生活を送つてはならぬのか？　あらゆることが今は可能に、そして容易に、そして確に見えた。世の中のすべてのことが愉快で、すべてのことが善く、すべてのことが面白

かつた。けれども彼女はなほ夢を續けたかつたので、更にまた夢の水を綿に注いで、それを吸ひ初めた。時々毒を鼻孔から遠ざけて、あまり多くを吸はないやうに、死なないやうにしながら。

彼女は月を眺めた、と其の中に顔を、女の顔を見た。彼女はまた鴉片の幻のやうな醉心地の中で郊野をぶらつき初めた。其の顔は空のまん中でぶら〳〵と搖れた。とそれが歌つた、それが、よく知つてゐる聲で、『愛の讃美歌』を歌つた。

それは侯爵夫人が中へはひつてピヤノに坐つたのだつた。

イイエットは今度は翼を持つた。彼女は、夜を、晴れた美しい夜を、森や流の上を飛んでゐた。翼を開いたり、翼を閉ぢたりしながら、丁度抱かれて運ばれてゐるやうに風に運ばれて、愉快に飛んでゐた。彼女が空氣の中を走ると、それが彼女の皮膚にキスした、そして彼女は下の方の物を何も見る遑のなかつたほどに早く、早く行つた、と彼女は池の汀に手に釣竿を持つて坐つてゐる自分を見出した。彼女は釣りをしてゐた。

何かゞ絲を引いた、で、彼女がそれを水から上げると、立派な眞珠の頸飾が下がつてゐた、それはずつと以前に彼女の欲しがつたものだつた。彼女はこの釣出した物を少しも驚かなかつた、そしてどうして來たのか知らないが、傍にゐたセルヰギイ

イの方を見た、彼もまた釣りをしてゐて、川から木馬を釣り上げた。

その時彼女はまた新たに覺めて來る感覺を覺えた、そして下から誰かゝ呼んでゐるのを聞いた。

母親が言つた。

『蠟燭をお消しなさいよ。』

すると、セルヰギィイのはつきりした聲が、おどけて起つた。

『蠟燭をお消しなさいよ、イイエットちやん。』

とみんながコウラスで續けた。

『イイエットちやん、蠟燭をお消しなさいよ。』

彼女はまたクロロホルムを綿に注いだ、けれども今はもう死にたくはなかつたので、顔からずつと遠くへ離しておいた、そして新鮮な空氣を吸ひながら、それと同時に、部屋の中は麻醉藥の窒息させるやうな香で充たさうとして、といふのは、誰かの昇つて來ることが分つてゐたからで、彼女はふさはしい姿勢を、死んだ人の姿勢を取つて、待つてゐた。

侯爵夫人は言つた。

『わたし何だか氣掛りだ！　あの馬鹿な子はあかりをテエブルの上に置いたまゝで眠つたんですよ。クレマンスをやつて、それを消したり、明け放してあるバルコンの窓を締めたりさせま

せう。』

と直きに小間使がドアをこつ〳〵と敲いて呼んだ。

『お嬢さま、お嬢さま！』

少し默つた後で、彼女はまた言つた。

『お嬢さま、侯爵夫人さまが蠟燭をお消し遊ばすやうに、窓をお締め遊ばすやうに、と仰有つてでございます。』

クレマンスはまた少し待つてから、今度は一層強く敲いて、そして叫んだ。

『お嬢さま、お嬢さま！』

イイエットが返辭をしなかつたので、小間使は降りて行つて、

侯爵夫人に言つた。

『お嬢さまは屹度おやすみ遊ばしたのでございます。門が差してありまして、お起し申すことは出來ませんでございました。』

オバルヂ夫人は呟いた。

『だつてあの子はそんなことをしてゐてはいけないんぢやないか？』

とみんなは、セル并ギイイの思ひ付きで、娘の窓の下に集つて、コウラスで叫んだ――『ヒップ！――ヒップ！――ハラア！――イイエットちやん！』

彼等の叫び聲は靜かな夜の中に起つて、月下の透明な空氣の

中を通つて、眠つてゐる國の上を渡つて行つた。そして彼等は遠ざかり行く列車の響のやうに、それが遠くへ消えて行くのを聞いた。

イイエットが返辭をしなかつたので、侯爵夫人は言つた。

『何も事がなくつて呉れゝばいゝが。わたし何だか恐ろしくなつて來た。』

するとセルヰギィイは、壁に沿うて仕立てられた大きなばらの藪から赤いばらや、まだ開かない蕾をむしつて、窓から部屋の中へ投げ始めた。

最初のばらが彼女に當ると、イイエットは身震ひして、危く

聲を立てようとした。別のは着物の上に、別のは髪の毛の中に、別のは頭の上を通つて、ベッドまでも行つて、それを花の雨で蔽うた。

侯爵夫人は息の詰つたやうな聲で、もう一度叫んだ。

『これ、イイエットや、返辭をおしよ。』

その時、セルヰギィイが言ひ出した。

『本當に、これやアたゞちやアないよ、僕がバルコンから登つて行つて見よう。』

所が士爵がむつとした。

『いや、いや、それやアあんまり虫が善過ぎる、僕は不承知だ。

こんな都合のいゝ法が……こんな都合のいゝ時があるものか、逢引をするのに！』

他の者もみんな娘がふざけてゐると信じてゐたので、叫んだ。

『吾々が不承知だ。これやア申合せてあるんだぞ。昇らせるな、昇らせるな。』

所が侯爵夫人は、氣が氣でなくて、繰返した。

『でも誰か行つて見なければなりません。』

公爵（クラヴロウ）は芝居がかつた身振をして、言つた。

『彼女は公爵（セルヂイイ）を寵してゐる、我々は裏切られてゐる。』

『なめかたで極めよう、昇つて行くものを、』と士爵が言ひ出した。

そして彼はポケットから百フランの金貨を取り出した。

彼は公爵と始めた。

『なめ、』と彼は言つた。

それはかただつた。

公爵は順番に金貨を抛りながら、サヴルに言つた。

『言ひたまへ、君。』

サヴルは言つた。

『かた。』

それはなめだつた。
公爵はそれに續いて同じ問を他のすべてのものにした。みんな失敗した。
セルヰギィイは、彼の向うに一人殘つてゐたが、例の横着な風で言つた。
『畜生、ごまかしてやがる！』
ロシア人は片手を胸に置いて、金貨を敵に渡しながら、言つた。
『自分で投げたまへ、公爵。』
セルヰギィイはそれを取つて投げながら、叫んだ。

『かた！』
それはなめだつた。
彼はお時儀をして、そしてバルコンの柱を手で指さしながら言つた。
『昇りたまへ、公爵。』
所が公爵はあたりをきよろきよろと見まはした。
『何を探してるんです？』と士爵が訊いた。
『だつて……僕は……僕は欲しいんだよ……梯子を。』
笑聲がどつと起つた。とサヴルが、進み出た。
『僕等が押して上げよう。』

彼はエルキユウルのやうな腕の中に彼を抱き上げながら、言た。

『バルコンにつかまりたまへ。』

公爵は直ぐにつかまつた、でサヴルが手を放すと、彼はぶら下がつて、足を空間にばた〳〵させた。そこで、セル非ギイイは其の夢中になつてゐる兩脚が踏臺を探してゐるのを見て取つて、全力を籠めて下の方へ引いた、途端に兩手が離れて、公爵は石塊のやうに、其の時彼を支へに來たベル非イギュ氏の腹の上へ落ちた。

『誰の番だい、次ぎは?』とセル非ギイイが訊いた。

所が誰も出て來なかつた。

『さあ、ベル非イギュ、やりたまへ。』

『有り難う、僕は今骨のことを考へてるんだよ。』

『ぢやあ、士爵だ、君は屹度攀ぢ登ることに慣れてゐるに違ひない。』

『僕は君に讓るよ、公爵。』

『ふ!……ふ!……さう來るだらうと待つてゐたんだ。』

そしてセル非ギイイは、注意深い目をして、柱の問圍を見まはした。

と、一躍して、バルコンにつかまると、彼は手頸でぐうッと

身體を上げて、體操教師のやうに逆立をするかと思ふと、ひらりと欄干を越えた。

見物人はみんな、鼻を空に向けて、喝采した。所が彼は直きにまた現はれて叫んだ。

『早く來た！　早く來た！　イイエットは氣絶してゐる！』

侯爵夫人は高い叫びを發すると梯子段へ向つて駈け出した。

娘は、目を閉ぢて、死んだ風をしてゐた。母親は氣違ひのやうになつて、はひつて來ると、娘の上に身を投げかけた。

『まあ、どうしたんだよ？　どうしたんだよ？』

セルヂギィイは床に落ちてゐたクロロホルムの壜を拾ひ上げた。

『自分で窒息したのですよ、』と彼は言つた。

そして彼は心臓の上に耳をつけてから、言ひ添へた。

『併し死んではゐません。生き返らせますよ。アンモニアがあるでせうか？』

小間使は、まご〳〵して、繰返した。

『何で……何で……ございますか？』

『鎮靜劑だよ。』

『ございます。』

『直ぐに持つておいで、そして戸を明けてお置き、空氣を流通

させるやうに。』

侯爵夫人は跪いて、啜り泣いた。

『イイエット！　イイエット！　嬢や、これ嬢や、嬢や、お聽きよ、返辭をおしよ、イイエット、娘や。おゝ！　まあ！　まあ！　どうしたんだよ？』

そしてびつくりした男達は役にも立たぬに動きまはつて、水や、タヲルや、グラスや、酢やを持つて來た。

誰かゝ言つた。『着物を脱がさなければいけないよ！』

と狼狽しきつてゐた侯爵夫人は、娘の着物を脱がさうとした。

が彼女はもう自分が何をしてゐたかも知らなかつた。其の手は

顫へて、こんぐらがつて、役に立たなかつた、で彼女は歎息した。

『わたし……わたし……わたしは駄目だ、わたしは駄目だ……』

小間使が藥劑師の壜を持つて歸つて來たのをセル非ギィイは明けて其の半ばをハンケチに注いだ。そして彼はそれをイイエットの鼻の下にぴたりとつけて息を止めさせた。

『よし、息をする、』と彼は言つた。『直ぐによくなりますよ。』

そして彼は彼女の顳顬や、頰や、頸やを、刺戟性の液體で洗つた。

そしてから彼は小間使に娘の着物を解くやうに指圖をした、

そして彼女がシャツの上にスカアトの外何もなくなつた時に、兩腕の中に彼女を抱き上げて、殆ど裸の身體の匂ひや、肉の接觸や、彼の口の下に撓んで僅に隱れてゐる乳房の柔かみやで心を動かされて、身震ひしながら、ベッドまで運んで行つた。

彼女が寢かされた時に、彼は眞青になつてゐた。

『直きに氣が付くでせう、』と彼は言つた。『何でもありませんよ。』彼は、彼女が絶えず正確に呼吸してゐるのを聽いたのだつた。所が、すべての男が、目をぢつとベッドに寢てゐるイイゼットの上に据ゑてゐるのを見ると、嫉ましい憤怒に身を震はせながら、彼等の方に進んで、言つた。

『諸君、あんまり大勢この部屋の中に居過ぎるよ。濟まないけれど僕等だけにして呉れたまへな、サヴル君と僕と、侯爵夫人と。』

彼は權威に充ちた冷たい調子で口を利いた。他の者は直ぐに出て行つた。

オバルヂ夫人は腕一ぱいにラヴァに取り縋つて、頭を彼の方に上げて、泣いた。

『娘を助けて……おゝ！　娘を助けて！……』

所がセルヂイは振り返つて、テエブルの上の手紙を見た。彼は素早く身體を動かしてそれを掴むと、宛名を讀んだ。でそ

れと悟ると考へた。『多分これは侯爵夫人の知らない方がいゝだらう。』と、封筒を破いて、彼は一と目にそれの含んでゐた二行を讀み下した。

わたしは死にます、おもちやにならぬために。

イイエット。

左樣なら、おなつかしいかあさん、許して下さい。

『馬鹿な、』と彼は考へた、『これは思ひ返させなければ。』

と彼は手紙をポツケットの中に隱した。

そして彼はベッドに近付いた、と直ぐに、彼の心に、娘は意識を恢復したが、羞かしいのと、氣が引けるのと、訊さ正されるのを恐れるのとで、それを見せずにゐるのだといふ考が起つた。

侯爵夫人は、今度は跪いて、頭をベッドの足につけて泣いてゐた。不意に彼女は言ひ出した。

『醫者を、醫者を呼ばねばなりません。』

所がセルヂイは、低い聲でサヴルと話してゐたが、彼女に言つた。『いや、もう濟みました。さあ、ちよつと出ていらつしやい、ほんたうにちよつと、あなたが今度いらつしやる時は、お嬢さんが屹度あなたにキスするやうにしますから。』

と男爵は、オバルヂ夫人を腕で抱き起して、連れ出した。

そこでセルヰギイは、ベッドの傍に坐つて、イイエットの手を取つて言つた。『嬢さん、もし、もし……』

彼女は返辭をしなかつた。寢床がいかにも暖かで、柔らかで、氣持がよかつたので、動きも、話しもせずに、いつまでも其のまゝにしてゐたいと思つた。無限の幸福が彼女を包んだ、いままでかつて覺えたこともないやうな幸福が。

夜の柔らかな空氣が輕い呼吸で、天鵞絨のやうな呼吸ではひつて來て、時々彼女の顏の上を氣も附かないほどにやさしく撫でて行つた。それは風のキスのやうな、すべての木の葉とすべての夜の影とで、川の霧で、そしてまたすべての花で、作られた扇の緩い爽かな息吹のやうな愛撫であつた、といふのは、部屋の中やベッドの上へ下から投げたばらの花とバルコンに絡みついてゐるばらの花とが、其のだるい香を夜風の健かな香と混ぜ合せたからだつた。

彼女はいかにも善いこの空氣を吸込みながら、目は閉ぢ、心はまだ殘つてゐる鴉片の醉心地の中に休めてゐた、と、もう死なうと思ふ心は全くなくなつて、却つて生きたい、幸福であり たい、どんなでもいゝから、愛されたい、さうだ、愛されたいといふ強い、傲つた望みが起つて來た。

セルヰギイは繰返した。

『イイエットさん、もし、もし。』

すると彼女は決心して目を開いた。彼は彼女の生き返つたのを見ると、言葉を續けた。

『もし、もし、何だつてこんな馬鹿なまねをしたんです？』

彼女は呟いた。

『だつてミュスカアド、わたしそれほど悲しかつたんですもの。』

彼は彼女の手を父親のやうにかたく握つた。

『いや、たいしたことになつたものだねえ、ねえ！　さあ、もう二度とこんなことはしないと僕に約束しなければいけません。』

彼女は返辭をしなかつた、が輕く頷きながら、見たといふよ

りも寧ろ感じたといつた方がよい位な微笑を浮べた。

彼はポケットからテエブルの上で見附けた手紙を引き出した。

『これをおかあさんに見せた方がいゝの？』

彼女は頭を『否』と掉つた。

彼はもう言ふべきことを知らなかつた、其の場所が彼には出口がないやうに見えたのだつた。彼は呟いた。

『ねえ嬢さん、人は非常に悲しいことをも辛抱しなければなりません。僕はよくあなたの悲しい譯を知つてゐますよ、であなたに約束する……』

彼女は吃つた。

『あなたはいゝ方だわ……』

二人は默つた。彼は彼女を見た。彼女の目の中には、何かやさしい、弱々しいものがあつた。と不意に彼女は、彼を自分の方へ引き寄せようとでもするやうに兩方の腕を擧げた。彼は彼女が呼んだものと思つて、彼女の上に屈んだ。と二人の脣はくつ付いた。

長い間二人は其のまゝでゐた、目を閉ぢて。所が彼は、分別を失ひさうになつたのに氣が付いて、身を起した。彼女は、今は本當にやさしく彼に微笑した。そして兩方の手で彼の肩に取り縋つて彼を引留めた。

『おかあさんを連れて來よう、』と彼は言つた。

彼女は呟いた。

『もう少し待つて頂戴。わたし大變に幸福なの。』

それから、ちよつと默つた後で、彼女は低い聲で、やつと聞えた位な低い聲で言つた。

『あなたはわたしを本當に愛して下さるの？』

彼はベッドの傍に跪いて、彼女の出した手頸にキスして言つた。

『心からあなたを愛します。』

所が誰かゞ戸の傍を歩いた。彼は一跳びに起ち上つて、いつ

も幾らかアイロニカルに見えたふだんの聲で叫んだ。

『おはひりなさい。すつかりよくなりました。』

侯爵夫人は兩腕を擴げて、娘の上へ身を投げかけた、そして顏一ぱいに涙をはら〳〵と流しながら、氣違ひのやうに彼女を抱いた。と、セルヂギィイは、魂は輝き、肉は顫へながら、夜の爽かな空氣を吸ひにバルコンへ出て行つて、小聲で歌つた。

女心はをり〳〵變る、
それでも信ずる、うつけもの。

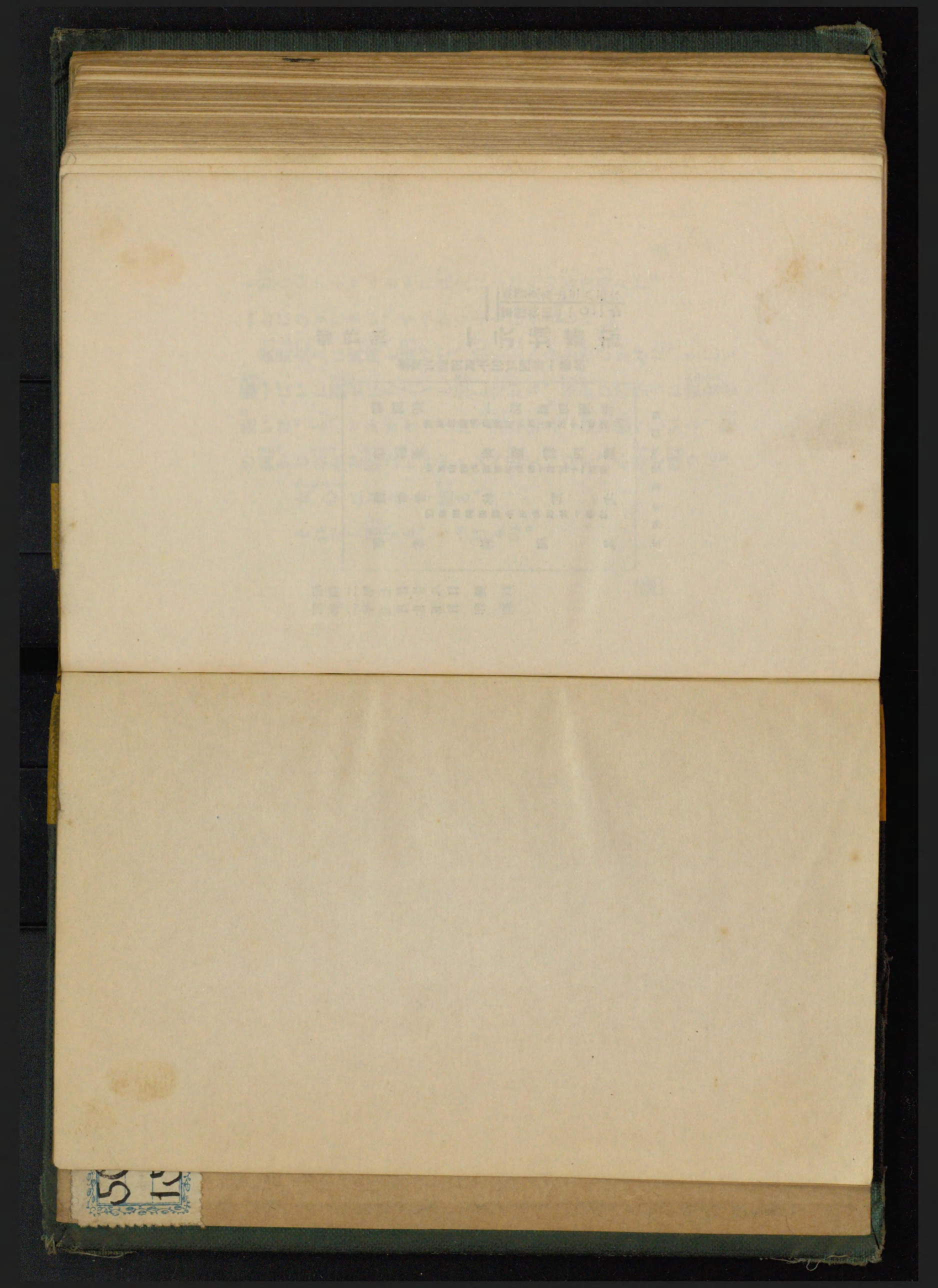
（終）

昭和二年七月廿五日印刷
昭和二年七月廿八日發行

著者　前田晁
發行者　東京市神田區小川町四拾一番地　林元弍
印刷者　東京市麹町區假田町四丁目三十一番地　齊藤猶四郎
印刷所　東京市麹町區假田町四丁目三十一番地　一元社印刷部

定價金貳圓五拾錢

發行所　東京市神田區小川町四拾一番地
一元社書店
電話神田(25)一〇二七
振替東京七三八三六



56
15

568
154

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black